

〔連載〕武州みたけの信仰⑨
おこなむちのみこと
大己貴命について(下)

國學院大學教授
神道學博士

三橋 健

医薬・治療の神さま

『日本書紀』の神代巻に、大己貴命と少彦名命は力をあわせ心一つにして天下を経営し、また国民や家畜のために病気を治療する方法を教え、鳥獣や昆虫からの被害をさけるまじないを定めたとあり、国民は今に至るまで、この神たちの恩恵をこうむらない者はいないと記してあります。

大己貴命は「国作大己貴命」ともいいますように、国土開発の神であることは、すでに述べた通りですが、医薬・治療の神としても広く知られております。例えば奈良薬師寺にある『仏足石歌碑』に、

薬師は、常のもあれど、珍人の、今の薬師、たふとかりけり、珍しかりけり、(原文は万葉仮名)

と歌われています。これは「医薬の神は、わが国在来の大己貴命・少彦名命

もおりますが、他国から来た薬師如来も尊く珍重でありますことよ」との意味で、この歌から奈良時代には、わが国の神道の神である大己貴命・少彦名命は仏教の薬師如来に相当すると考えられていたことがわかります。



因幡の白ウサギ

医薬・治療の神としての大己貴命について語ろうとすれば、この神の別名

であります。常世の国は、はるか遠く離れた所にあると信じられてきた国ですが、そこは不老不死の国であり、別に黄泉の国ともいわれています。大己貴命が黄泉の国の大神と考えられるようになるのも、このような関係からと思われまふ。

そのような永遠の寿命の国である常世の国から沸き出してくる湯は、霊泉であり、それを浴びると仮死状態であった生命もよみがえると信じられてきたのです。つまり湯を浴びると疲れた心や身体は清められ、活力のある心身に蘇るのは、湯は聖なる水、ミソギの水であるからなのです。湯は斎用水の縮った語と説明されています。

また温泉は「薬師湯」ともいわれ、温泉地には薬師を安置した薬師堂や温泉寺があります。下呂温泉、日光湯本温泉、草津温泉などは有名です。これは薬師如来は大己貴命と同じく温泉の守護仏と考えられたからであります。

『古今著聞集』巻二に、行基が有馬温泉へ行く途中、山中で一人の病人を看病する話があり、その病人の本体は薬師如来で、行基の献身的な看病をほ

である大国主神と因幡の白ウサギの神話にふれておく必要があります。

これは有名な神話ですので、あらためて述べるまでもありませんが、『古事記』に、大国主神は身体の毛をむしられ、あか裸となった白ウサギに「きれいな水で傷を洗い、蒲のハナにくるまれば治りますよ」と教えています。この方法は、当時の治療の一つであったと思います。

また大国主神ご自身も、多くの兄弟からさまざまな虐待を受け、猪であるときだまされて真赤に焼いた石を捕らえて大やけどを負います。しかし、この時も、赤貝や蛤の貝殻をすりつぶした粉に母乳を混ぜた薬を作り、それを塗って治療しております。これも恐らく古代における民間療法を伝えるもので、大国主神は、そのような治療方法を知っていたことがわかります。

大国主神が、現在も医薬の神・治療の神として信仰されているのも、このような由縁によるものなのです。

温泉の神

『伊予国風土記逸文』に、大穴持命

めて「私は温泉の行者である」といっており、薬師如来と温泉との関係が語られております。

大己貴命を祭る神社

大己貴命は別名が多く、それらの名はそれぞれに説話が付いています。活動も多岐にわたっており、神格も複雑で一筋縄ではいきませんが、それらは根底で連結しているように思います。最後に、この神を祭る著名な神社を北の方から掲げてみますと、

札幌市の北海道神宮、旭川市の上川神社、帯広市の帯広神社、秋田市の太平山三吉神社、山形県東田川郡の湯殿山神社、茨城県東茨城郡の大洗磯前神社・那珂湊市の酒列磯前神社、日光市の二荒山神社、大宮市の水川神社、東京都千代田区の神田神社・青梅市の武蔵御嶽神社、富山県東砺波郡の高瀬神社、石川県羽咋郡の気多大社、津島市の津島神社、大津市の日吉大社の西本宮、西宮市の西宮神社・宍粟郡の伊和神社、桜井市の大神神社、島根県簸川郡の出雲大社、香川県仲多度郡の金比羅宮となります。詳細は省略します。

(大己貴命)が仮死状態になった宿奈毘古那命(少彦名命)を蘇らせた話が見えます。大穴持命は速見の湯(別府温泉)を引いて、その場に宿奈毘古那命をつけて蘇らせております。これは道後温泉の起源説話ですが、その最後のところに「温泉の効能は、神代だけでなく、今の世にも多くの人々の病気を治し、健康を保つ上で霊妙です」と記してあります。大穴持命は温泉の霊妙な効能を熟知していたことがわかります。

『出雲風土記』の意宇郡の条に、玉造温泉の起源説話が記されています。温泉に老若男女が集まり、市を開き、飲食をし、歌舞をして楽しんでいますが、やはり「この温泉を一度浴びると容姿端麗となり、二度浴びると万病が治る、昔から湯の靈験があらわれなかったことはない、人々は、この湯を尊んで「神の湯」とよんでいる」と見えます。「神の湯」の「神」は大己貴命・少彦名命ということになります。また、これらの神を祭る湯神社・温泉神社も各地に鎮座しております。温泉は常世の国と直結している霊泉